つかんだ行動への自信

COヨーカン街頭販売

本所主婦会

私たちは主婦会本所支部の統一活動の一かんとして、COヨーカンの街頭販売取り組みを、五月九日実施しました。

取り組みをするにあたっては早くから各分会で討議を深めた結果、多くの参加を見ることができました。不十分さはあっても、一定の成果があったと思います。

春闘の真っただ中で、心にハチマキをしっかりとしめ直し行動に移りました。

二人一組でビラを抱え、三井東圧化学の社宅を中心に、周辺の民家へ向け行動開始。

一時間余の行動後全員集会所に集まり、臼井分会心づくしの握りめしをほおばりながら総括。遺族やCO患者、その家族の苦しみ、あるいは合理化の悲惨さを訴えたことの満足感と行動への自信。

「甘いものは食べないから」とことわられたくやしさなども出し合いながら、いつの場合も困難はつきものだが、それを克服してこそ前進があることを確認しました。

市内を堂々と行進する三池主婦会

（写真はメーデー大会の日）

北門で事故発生（三川）

あぶない有明炭陸送

周辺の道路の交通災害防止設備こそかなり改善されたものの、なお危険が心配されていた三川鉱の北門でついに交通事故を発生させてしまった。

三池労組が、有明炭陸送開始を前に、会社側へ行なっている警告を無視してきた以上、明らかに会社が負うべき責任だ。

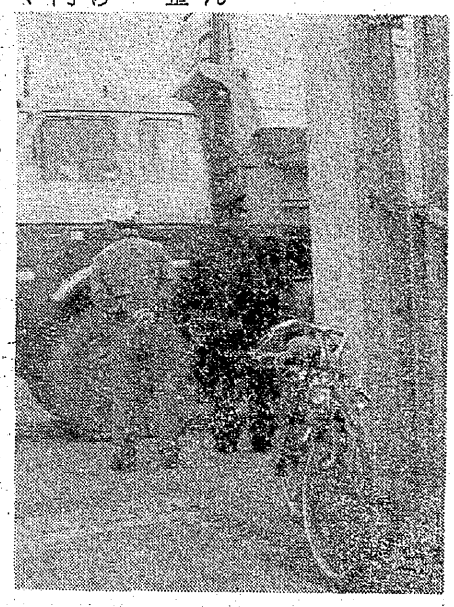
事故が発生したのは、三日午後三時五十分ごろか。有明炭を満載しながら、三港運送（三池港務所の下請企業）のダンプが構内にはいるために、三川鉱の北門にさしかかったところで、自転車をはね飛ばした。

もちろん自転車のペタルを踏んでいた人は重傷、ただちに永田整形外科へかつぎこまれた。

常づね心配されていた場所だけに、三池労組はすでに早く、同門には事故発生防止のために、とくに有明炭輸送ダンプの入出門を誘導するために、見張人を立てるように要求してきたもので、そこにこんどの事故となったもの。

三池労組は、三池港務所を通じてさっそく同門に見張人を立てるよう、改めて要求したが、この種の災害発生防止に対する会社側の誤った姿勢が強く問われている。

人命軽視の会社の姿勢が、ここでもさらけ出された。



事故が起きた三川鉱北門

生活記録

老母の涙

主婦会宮浦支部　高橋保子

かれこれ六、七年にもなりましょうか。

それは私が、全国母親大会に参加したときのことでした。若い母親の中に、ひときわ目をひく品のいい老母の淋しげな顔があったのです。そのときの印象を消すことのできないものにしたのが、その老母の涙ながらの訴えでした。

「私が間違っていました。皆さん二度と、私のような間違いを繰り返さないで下さい」

養老院からやってきたという、老母の話はこうでした。

裕福な家庭の妻であり、二児の母親であったその人のたった一つの夢は、二人の息子にエリートコースを歩ませることでした。

老母の期待をそのままに、息子たちは一流の大学をでて、一流商社に勤務し、幸せな家庭を築いているということでした。

老母が幸せの絶頂にあるときのこと、突然、老母の夫の方がこの世を去ったのです。

老母の悲劇が、ここからはじまりました。

一人取り残された淋しさと、老いて行く身の心細さに耐えかねて何度も何度も、老母は養老院行きを考えなければならなかったといいます。でもその頃老母はなお、子や孫に囲まれた温い家庭の雰囲気を夢見ていたのでした。

老母の、こうした心情をよそに誰一人として、一緒に住もうと声をかけてくれる者はなかったのです。

いまさらながらふり返える、永い歳月。

そのときはじめて、老母の目が覚めたのでした。

「私は、子どもたちに対する知識の教育に力を入れるあまり、心の教育をするのを忘れていたのです。世の中の幸せは、けっして地位でも財産でもありません。温い心のふれ合いなのです」

切々と訴える老母の目には、涙が光っていました。

あれから数年、年を経るごとに私にも、老母のそのときの涙がわかってきました。

老人の自殺。

寝たきりの老人。

たらいまわしされる母親。

文明の陰で、さまざまな公害に泣く人びと。

何もかもが合理化されて行く中で、しっとりとした人の心が失われて行く現代。

老人同居の是非はともかく、子どもの非情と思われる態度を、自分の育てかたの責任として受けとめる老母の姿に、私は何かを教えられるような気がしてならないのです。

とかく自己主張の強いあまり、無意識の中に人の心を傷つけながら何の反省もできない、私自身の日頃の明け暮れを思い返しながら、人の心を温く包むだけの包容力が持てたらなア、としみじみ思う私です。

×

いま三池主婦会新聞や、主婦会港務支部の新聞などを中心に、三池の主婦の中から「生活記録」を書く人がでてきました。

このような無垢な、素裸な人間同志を文章を通してぶつけ合うなかで、もう一度「団結」というものの意味を考えなおす。それがいま私たち労働者に、強く求められている一つのことではないでしょうか。

三池の主婦の皆さん、大いにペンを取りましょう。匿名も、大いに歓迎します。

――編集部

変見

「ゆっくり遊んでおいで」「あまりおそく帰るんじゃないぞ」とか、主人たちの声におくられて私たち七人山鹿保養センターへ、一泊の旅へと出発しました。

それぞれ忙がしい中をやりくりして作り出した、貴重な一日。思う存分羽根をのばしましょう。

南関でのりかえた国鉄バスに車掌さんが乗っているのにびっくり。思わず「アラ」と、とん狂な声をあげます。今ではそれをめずらしいと思うほど、すっかりワンマンカーにならされてしまっていることに改めて気がつくのでした。

一泊旅行の思い出

主婦会臼井建設　東敬子

合理化で苦しめられている労働者がいるというのに、「ワンマンカーより気分的にゆとりがあって、安心して乗れるね」、など話し合い、降りるとき赤い腕章をしている同志に「ご苦労様」、の言葉だけは忘れない主婦会員たちでした。

今もCO患者となった方が病床で苦しんでいます。今後ともよろしくお願いします」のあいさつに、たくさんの拍手でした。

「三池の主婦の子守り唄」を披露して舞台をおりたところ、八女からきたという人が話しかけてきて、「がんばってください」、と部屋まで押しかけてきてくだされて、大変よい交流ができました。行く先々で、自分たちの闘いを知ってもらおう、何かをつかもう、という意気込みが行動のはしはしにうかがわれます。

翌日は菊池神社へ。見事に咲きほこっているつつじ。寝ころべば葉桜の美しい木々の間からあの真っ青な空がまぶしいばかりにみえかくれするのでした。ふと「こんなにも空はきれいなものだったのか」、と思ったものです。もう永い間、こんなに豊かな感情を失なってきている自分に気がついたものです。遠い昔彼と歩いた思い出の中に、こういう情景もあったような気さえしました。

みんなの協力でこんなにすばらしい一日をすごすことができたことに感謝すると同時に、今後も共にがんばることを誓い合いながら帰途につきました。

楽しい夕食のひととき。大広間で、大勢での食事です。

舞台では、歌が出始めています。私たちも舞台にのぼりましたが、会は本部の事務局長の三池主婦会の紹介から始まり「三十八年の大爆発のときは、皆様には大変お世話になりました。

×

私の書棚

こんど読売新聞社から〝母たちの昭和史〟という本が発刊されました。

これは、昨年全国地域婦人団体連絡協議会が募集した主婦たちの手記――九百四十八篇の中から選ばれた一百篇を集めた本です。

「半世紀におよぶ激動の昭和を、日本の母親たちはどう生きてきたか？」――、戦後の世代には想像を絶する体験を切々と訴える感動的な文集になっています。

とくにこの文集には、三池のひとりの主婦の手記も含まれております。その人は中川美津子さんです。

感動呼ぶ本

母たちの昭和史

中川さんはいま大牟田北高校の養護教諭として働いていられる方ですが、かけがえのない子供さん（三男）の命を、森永ヒ素ミルクのために奪われ、いま森永資本の責任を追及するため立ち上がっていられます。

中川さんのご主人は一実さんという方で、中川さんともども三池闘争を闘い抜いた後停年のためご退職。不幸にして他界されたのですが、中川さんの文章はきっと三池の私たちに必ずや感動を呼び起こさずにはいないでしょう。とくに主婦の皆さんに、ご一読をおすすめします。

価格は九百円です。

×　×